

### 中林梧竹 所蔵作品 用印

17 行書中国諸家詩六幅  
18 隸書何君閣道碑軸



「日本梧竹」  
(白文方印、3.0 × 3.1cm)



「再入燕山」  
(朱文方印、3.0 × 3.1cm)



「後身名士禪仏身」  
(白文円印、4.6 × 2.3cm)

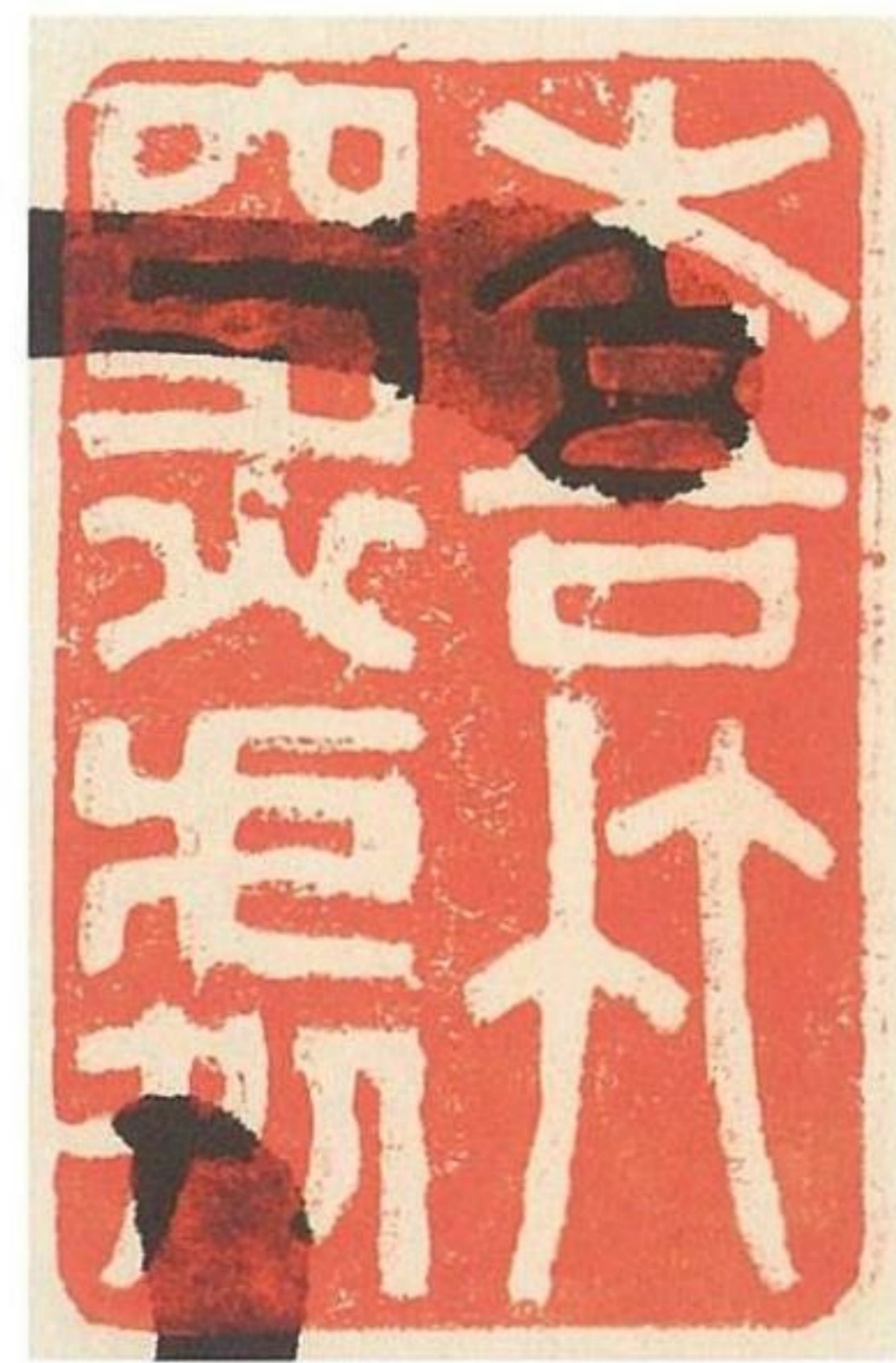
16 楷書元明人詩対幅・19 楷書遊香積寺詩軸



「中林隆経」  
(白文方印、5.9 × 6.0cm)



「字子達」  
(朱文方印、5.8 × 5.9cm)



「梧竹深処」  
(白文方印、7.0 × 4.4cm)

(左幅)



「振衣万里長城」  
(朱文方印、3.1 × 3.0cm)



「濯足浙江怒潮」  
(朱文方印、3.1 × 3.1cm)



「梧竹」  
(朱文円印、3.4 × 1.7cm)

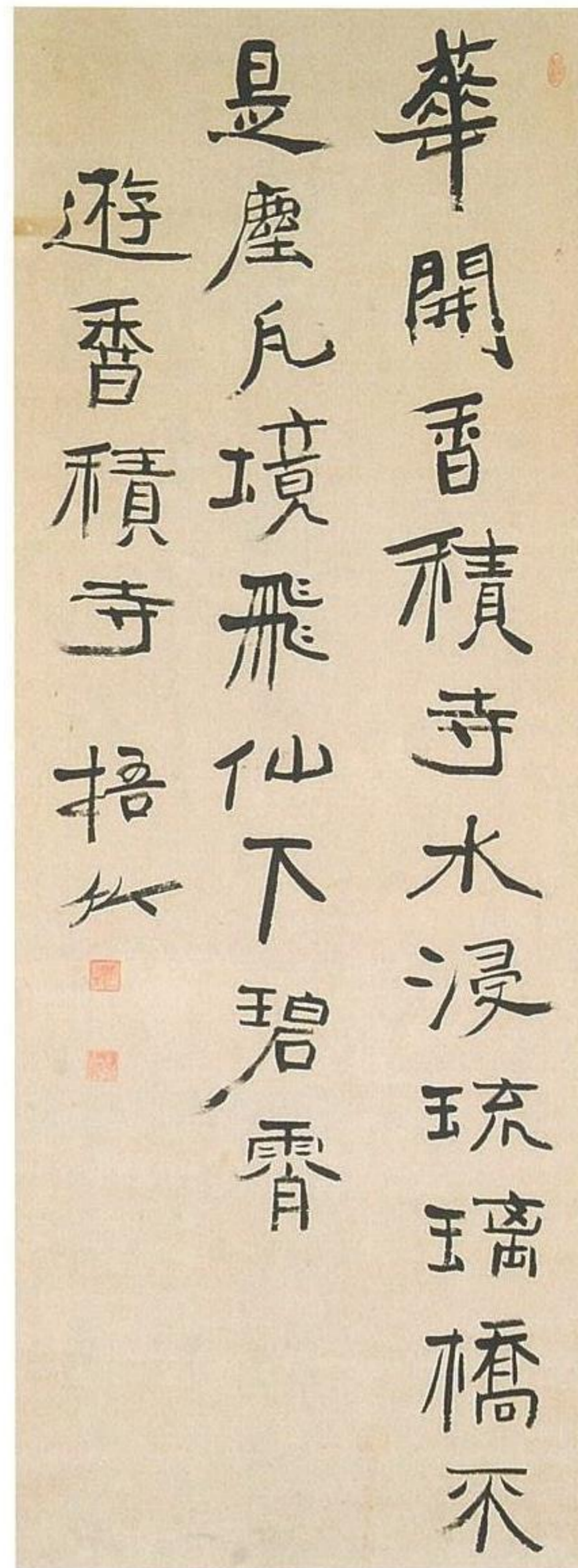


「九州一草庵主人」  
(朱文方印、2.9 × 2.8cm)

(右幅)

函蓋表書  
梧竹書 遊香積寺詩  
巻軸

函蓋裏書  
昭和五十七年歲次己未秋  
新心齋主 中林梧竹



19

楷書遊香積寺詩軸

中林梧竹 (二八二七〜一九一三)

明治後期 紙本墨書 六一・二×六〇・二cm

六朝楷書の要素に梧竹自身の書風を織り交ぜた作品。中国西安の名刹・香積寺を訪れた際に詠んだ自作詩を揮毫したもの。梧竹の書は、強く斬り込む起筆と強靱な筆触に特徴があり、「名刀の切れ味」と称されるが、本作はそこから一歩突き抜けた独自の構成が見受けられる。余白を十分にとった上品な仕上がりである。  
函書には、昭和五十七年(一九八二)の井上桂園(一九〇三〜一九九七)の鑑識が遺る。

【釈文】

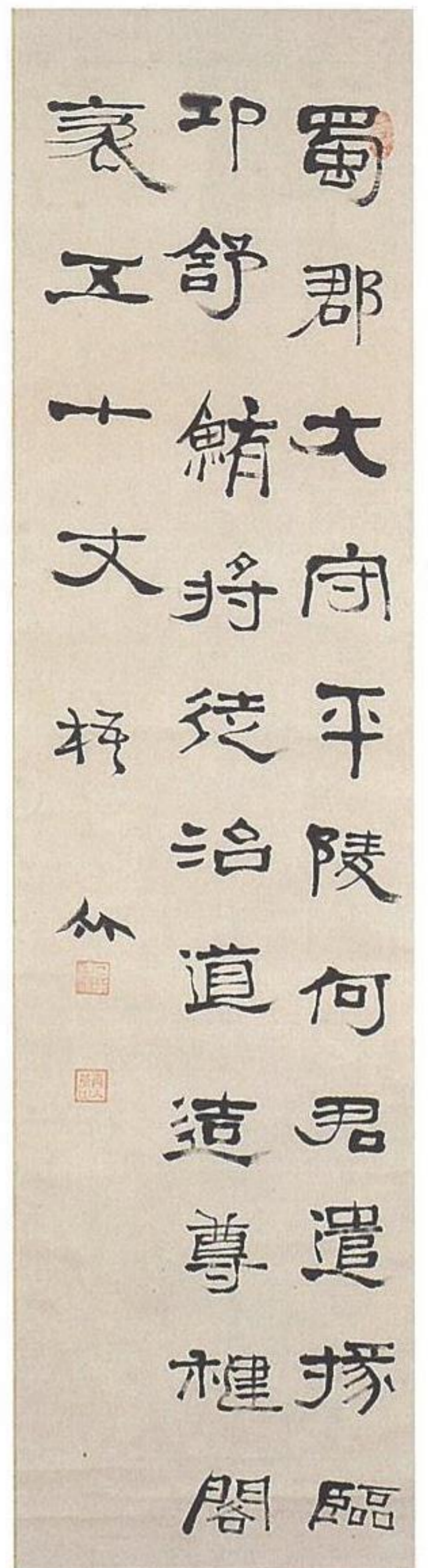
華開香積寺水浸琉璃橋不  
是塵瓦境飛仙下碧霄  
遊香積寺 梧竹

18

隸書何君閣道碑軸

中林梧竹 (二八二七〜一九一三)

明治後期 紙本墨書 一五〇・七×三八・六cm



四川省榮經県の西方、榮河南岸の崖壁に刻された、建武中元二年(五七)刻石碑の臨書。早期の漢隸で、波磔が少なく縦横画が整っていることが特徴であるが、梧竹が臨書すると不思議なことに、その文字は生き生きと動き出してくる。

【釈文】

蜀郡太守平陵何君遺掾臨  
邛舒鮪將徒治道造尊榿閣  
袤五十丈 梧竹